

24 「富士曼荼羅図」の世界

～富士山信仰と旅～

1 「富士曼荼羅図」について

表紙を御覧いただきたい。この絵は富士宮市の富士山本宮浅間大社に所蔵されている重要文化財「絹本著色富士曼荼羅図」(186.6×118.2cm)である。戦国時代の富士参詣の様子が生き生きと描かれている。参詣曼荼羅とか垂迹曼荼羅などとも称される一連の曼荼羅には、安価な泥絵具を使用した土俗的で簡略な絵が多い。だが、この絵は例外的に優品である。画中右下隅に狩野元信(1476～1559)の朱印(壺印)があるが、画家については「元信工房の有力画人」とする説が大勢を占める。

画面の下段には駿河湾、三保の松原、清見寺と清見ヶ関が描かれ、西方からやってくる道者(参詣者)の姿が見える。この一行がこの絵の主人公的存在と思われ、この後も各場面に現れてくる。富士川を挟んですぐ上には大宮の浅間神社と湧玉池(禊ぎをしている人物が見える)が描かれている。本殿は一層造りで、徳川家康によって建立された二層造りの浅間造りではないので、

〈図1〉大宮の町場推定図



『静岡県史』通史編2 中世 1127頁より

天正年間(1573～92)に兵火で焼失する以前の姿をあらわしたものである。横に幾筋も伸びている雲状の霞は「すやり霞」といい、この霞で場面の転換を示している。湧玉池の上の中央には霞を隔てて村山浅間神社が位置している。ここでは大日堂が大きく描かれ、この曼荼羅が村山の大日堂を中心とした修験道勢力と関係が深いことを示している。大日堂の下には水垢離をとる道者が見える。村山から上には、中宮八幡堂・御室大日堂などと推定される建物が描かれている。なお、このあたりから女性の姿が見えなくなる。富士は女人禁制の修験の山だったのである。

さて、御室大日堂と思われる建物の裏では松明を受け取って頂上に向かう道者がいる。暗いうちに登り、御来光を拝もうとするのは今日と変わりない。ここは森林限界で、現在の5合目付近にあたる。これから先は一本の木も生えない岩山を、御師(神社の祈祷・参詣の世話をした下級神官)の導きで「六根清浄」を唱えながら登るのである。三峰型の頂上には3体の仏像(中央が阿弥陀如来、左右は諸説あり)が描かれている。また、山腹の左右には日月が描かれ、瑞雲・紫雲が棚引いている。山頂は極楽浄土として描かれているのである。

人々が心身を清め、苦行して富士山頂をめざしたのは、それが浄土にたどり着くことであり、そこから帰ってくることは清浄無垢に生まれ変わるのだと信じていたからである。このような富士山信仰をさらに広め、より多くの参詣者を集める目的で作成されたのが参詣曼荼羅であった。曼荼羅は人々の前に掲げられ、絵のなかの場面を説明しながら富士信仰へ誘う「絵解き」に使われたものであろう。

2 仰ぎ見る山から登る山へ

だが、本来、富士山は麓から^{あが}崇めるものであり登拝の対象ではなかった。現在、全国に所在する約1,300余社の浅間神社の多くは富士山を取り巻くように分布しているが、その火山神(浅間神)の遙^{よう}拜^{はい}所^{じょ}が浅間神社に発展したものと考えられている。なかでも富士山頂に奥宮を持つ富士山本宮浅間大社は駿河国の一宮であり、文字通り浅間神社の総本宮として浅間信仰の中心であった。

ところが、平安末期に真言修験者^{しんごん}末代^{まつだい}が山頂^{だいにちし}に大日寺^{だいじ}を建て、一切経^{いっさいきょう}を埋納したのを契機に、修験の登山者が多くなる。そして、村山(大宮)・須山・須走・吉田の登山道が開け、富士山は修験道の霊山として発達した。こうして富士の山の神である浅間大神は、仏教と習合して浅間大菩薩^{せんげんだいほ}となり、その本地仏^{だいにちよらい}は大日如来とされた。そして、室町時代になると参詣としての登山が確立し、富士登拝が民衆の間に広まった。山梨県の吉田口の状況ではあるが、『妙法寺記』の1500(明応9)年の記事には「富士へ道者参ること限りなし」とある。しかし、数ある登山口のうち村山(大宮)口は、村山修験・大宮社人が今川氏の庇護^{ひご}を得て強大な勢力を誇ったこともあり、大いに栄えた。享禄・天文(16世紀前半)頃の大宮には道者の宿泊などを世話する坊が30余坊を数えたという。

3 浅間大社門前の六斎市

さて、この富士山本宮浅間大社の門前には市が開かれていたことが知られている。〈史料1〉は、1566(永禄9)年4月3日に今川氏真^{いじろく}が同社の大宮^{うじざね}司^{だいぐう}富士兵部少輔^し(信忠)に宛てた朱印状であるが、

- 1) 大宮の市は月に6回開かれる六斎市であり、楽市となった
- 2) 関銭^{せきせん}を徴収する目的で設置されていた神田橋関^{かんだばし}は停止された

ことなどがわかる。

神社の祭礼日に合わせて集まった商人が、臨時に小屋掛けして市が開催される。そして、それが次第に常設の店舗を構えるようになって町が形成されるといわれている。大宮の市も楽市や関所の廃止などの領主側の政策により次第に常設化され、町へと発展していったのであろう。これから12年後の1578(天正6)年5月晦日、武田氏は「御遷宮の間、当町中において押買狼藉・喧嘩・口論等、堅く禁じられ畢」という内容の朱印状を当社に出している。この頃すでに大宮に町が形成されていたことがうかがえるのである。

もう一度「富士曼荼羅図」を見てみよう。村山の浅間神社に向かうため、湧玉池から流れる神田川に架かる橋を渡ったあたりに家並みが見える。これは臨時の小屋掛けではなく、常設された建物群であると思われる。道者の一人が休んでいる場面も見られる。

なお、近年の研究では、「富士曼荼羅図」に狩野元信が直接関与したことを指摘し、さらに、発注主を今川義元とし、妙心寺派の禅僧を通じた元信との繋がり(義元-太原崇孚-大休宗^{たいけんそうふ}休^{だいきゅうそう}-元信という紐帯)から、製作時期を元信最晩年の約15年間に絞り込んだ説も出ている(平成16年美術史学会全国大会 高橋真作氏発表「狩野元信印『富士参詣曼荼羅』について」)。

〈参考文献〉

『静岡県史』通史編2中世 第2編第5章第3節、第3編第8章第2節

〔史料1〕
富士大宮(原文複製) 毎月六度市之事、押買狼藉非分等有之旨申条、自今已後
(静岡県史) 之儀者、一円停止諸役、為二楽市一可二申付之一、并神田橋関之事、
為二新役一之間、是又可レ令レ停止其役一〔後略〕
(『静岡県史』資料編7中世3 四頁)